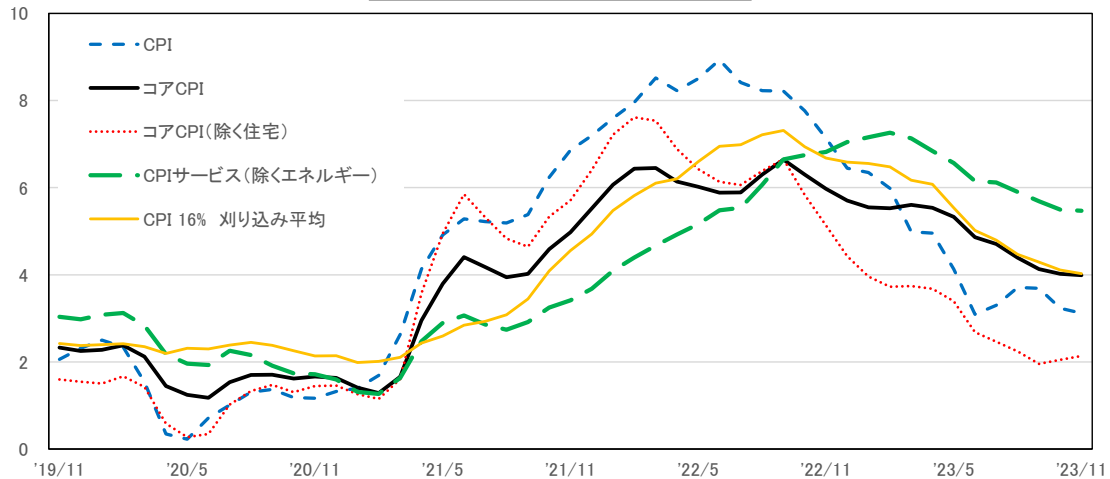


(米国) 下げ渋るインフレ率

11月の消費者物価指数(CPI)を確認すると、総合は前年比3.1%(前月比は0.1%)、食料とエネルギーを除くコアは同4.0%(同0.3%)となった。鈍化基調が維持されてはいるものの、どちらかといえば10月から小幅に上振れたと解釈できる。内訳をみると、住宅項目の上昇率が前年比6.5%と高い一方で、住宅を除いたコアCPIは前年比2%程度まで鈍化している。

(前年比%)

消費者物価指数の推移(前年比)

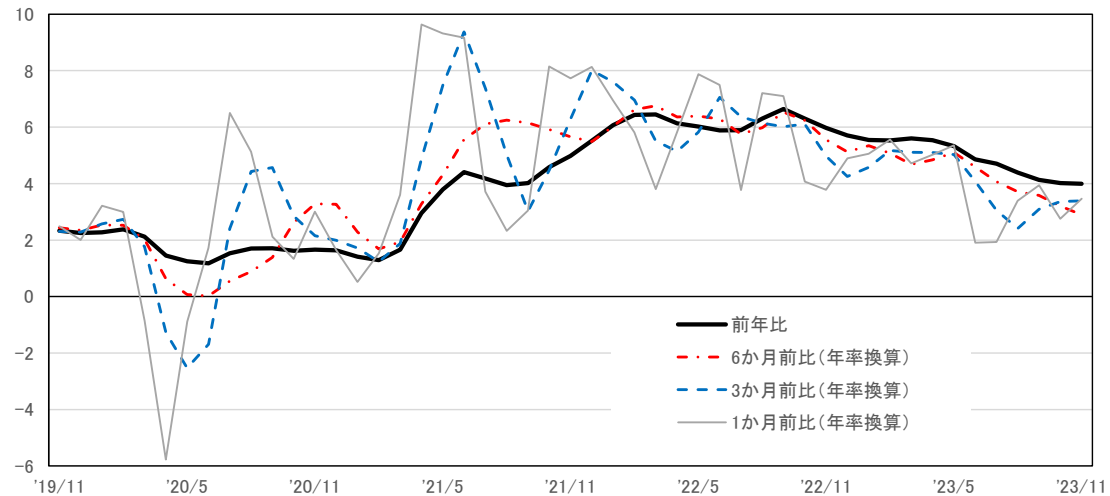


(資料)米労働省統計局、Refinitiv

コアCPIについて、より足元の動きが確認しやすい、1、3、6か月前比(年率換算)を計算すると、それぞれ3.5、3.4、2.9%となった。2%程度で安定するまではしばらく時間がかかりそうだ。

(%)

コア消費者物価指数の推移



(資料)米労働省統計局、Refinitiv

利下げ開始時期を考える上では、11月CPIからは、早急な利下げの可能性は低いことがうかがえる。12月FOMC(12月12～13日)後に公表される経済見通しにおいて、利下げ時期の見通しが正確にわかるわけではないが、筆者としては、24年半ばまでは現行の5.25～5.50%を維持した上で、過度な金融引き締めを避けるべく、速いペースでの利下げが行われると現時点では予測している。

前回の経済見通しが公表された9月時点から、インフレ率は着実に鈍化してきた。日本時間今晚発表される12月FOMCと経済見通しを通じて、FRBが最近のインフレ率についてどのように考えているか確認することとなるだろう。